



令和7年度 農山漁村女性活躍表彰

受賞者取組資料集

海、山、里で
輝く女性に
花束を



概要

「農山漁村女性活躍表彰」は、我が国の農山漁村の女性のいきいきとした活躍やその環境づくりについて優れた活動を行う個人や団体を表彰しています。

その取り組みは、創意工夫にあふれる唯一無二で魅力的なものです。

今回、本年度の受賞案件をすべて収録した

「農山漁村女性活躍表彰受賞者取組資料集」を作成しました。

これまでの受賞者の皆様に実施したアンケートでは、受賞後の変化として「地域での認知度が高まった」「自分の活動に対する周りの人の理解が深まった」といった声をいただいております。

ぜひ、広くご活用いただき、女性の農山漁村における日本全国の多様な取り組みを多くの方に知っていただくとともに、農山漁村の女性自身や女性の活躍を後押しする地域の関係者の方々がさらに自信を持って活動を進める一助としていただければ幸いです。

令和8年3月 農林水産省経営局就農・女性課

選考のコメント

令和7年度の農山漁村女性活躍表彰事業では、6部門に28道府県から42事例の応募がありました。審査委員6名が審査基準に基づき厳正な選考を行い、各部門の受賞事例を選考しました。

A女性地域社会参画部門(個人)では、山口由美さん(埼玉県)が大臣賞を受賞されました。山口さんは、企業やホテル、大学との商品開発、カフェ経営などを通じて「越生のうめ」のブランド化を推進しています。審査委員会では、経営局長賞の中西眞喜子さん(三重県)、協議会長賞の大島美智子さん(愛知県)を推す委員もおり頭を悩ませたのですが、山口さんは全国サミットを立ち上げるなどの優れたリーダーシップを発揮し、様々な主体とのコラボや梅の輸出にも取り組んでいるところを評価しました。

B女性地域社会参画部門(組織)では、味工房小諸すみれ(長野県)が大臣賞を受賞されました。同会は、農産物を加工して魅力を発信したいという思いから70名近い農村女性たちにより創設され、地域農業の振興と食育・地産地消推進のモデルを築かれました。審査委員会では、経営局長賞の幸の郷かほく(熊本県)を推す声もありましたが、多くのメンバーとともに合意形成を重ねて活動を継続している点を高く評価し、味工房小諸すみれに大臣賞を贈ることとしました。

C女性登用・組織参画部門では、比企地域女性農業委員・農地利用最適化推進委員連絡会(埼玉県)が大臣賞を受賞されました。同会は、女性登用推進に地道に取り組んできた結果、全国や県の平均より高い女性比率を実現し、さらに市町村を超えたネットワークにより新任の女性農業委員の支援につながっている点が高く評価されました。なお、局長賞の両総土地改良区(千葉県)、協議会長賞の清水景子さん(山梨県)の事例は、男性が庄

倒的に多い土地改良区からの貴重なエントリーであり、今後さらにこの分野を伸ばしていくきっかけになれば幸いです。

D女性優良ビジネス部門では、乾裕佳さん(大阪府)が大臣賞を受賞されました。乾さんは、経営者として明確な販売目標を立てて着実にそれを達成していること、農業の新たなビジネスのパイオニアとして課題を突き破り、挑戦をする姿勢が高く評価されました。経営局長賞の(株)光ファーム 篠塚 朋子さん(茨城県)を推す委員もおりましたが、女性が経営主として活躍している点を評価して乾さんを大臣賞に選びました。

E女性新規事業・チャレンジ部門は、花坂 薫さん(神奈川県)が大臣賞を受賞されました。花坂さんは、酪農の新規就農のモデル的な取り組みであること、また、生乳加工・販売による高付加価値化と、里山環境を活かす革新性を両立させている点が高く評価されました。審査委員会では、経営局長賞の(株)SATO FARM(青森県)を推す声もありましたが、経営の新規性とモデル性を高く評価し花坂さんに大臣賞を贈ることとしました。

F女性活躍応援・次世代育成支援部門では、(株)ジョージア園芸(広島県)が大臣賞を受賞されました。同法人は、女性が主体的に働ける環境づくりを行い、また、小学校での栽培指導も実施するなど次世代育成に力を入れている点が評価されました。

最後に、釜石湾漁業協同組合白浜浦女性部(岩手県)は、東日本大震災後に海藻の加工品開発に取り組み、復興のシンボルとなりました。震災から15年の節目でもあることから、これまでの活動に敬意を表し審査委員特別賞をお贈りすることにしました。本表彰事業に取り組んでくださった方々、また、各県や市町村、関係機関等のみなさまに厚くお礼を申し上げ、審査講評とさせていただきます。 審査委員長 岩崎由美子

審査委員プロフィール



岩崎 由美子

福島大学 行政政策学類 教授

埼玉県生まれ。早稲田大学大学院法学研究科博士後期課程単位取得退学。住民主体の計画づくり、農山村地域活性化、震災からの地域復興、農村女性起業などを研究。主な著書として、『食と農でつなぐ福島から』（岩波書店、共著）、『小さな自治体の大きな挑戦—飯館村における地域づくり』（八潮社、共著）、『成功する農村女性起業』（家の光協会、共編著）など。



五條 満義

東京農業大学国際食農科学科 准教授

全国農業会議所に8年間勤務後、1997年に東京農業大学専任講師。助教授を経て准教授。日本農業法学会副会長。伝統野菜の大蔵大根の復興を応援。著書に『家族経営協定の展開』（筑波書房）、『中国の大学と農村は今』（東京農大出版会）、『家族経営協定最前線』（全国農業会議所）など。過去に内閣府男女共同参画会議専門委員、政府の第2～4次の男女共同参画基本計画策定作業に加わる。



小川 理恵

一般社団法人 日本協同組合連携機構 (JCA)
基礎研究部長 主席研究員

一般社団法人日本協同組合連携機構 (JCA) 基礎研究部長 主席研究員。博士 (農学)。1997年に、前身である社団法人地域社会計画センターに入会。総務課長、企画調整室長を経て研究職に職種転換、現在に至る。研究分野は地域づくりと女性活動。主な著書に『魅力ある地域を興す女性たち』（農文協、2014年）、『JA女性組織の未来 躍動へのグランドデザイン』（共著、家の光協会、2021年）、『ダイバーシティJA だれもが活躍できる地域をめざして』（共著、全国共同出版、2024年）



平田 真一

有限会社 平田観光農園 代表取締役

1965年8月長野県生まれ。広島大学法学部卒業後、落合経営会計事務所に入社。その後、有限会社平田観光農園に就職。2006年7月に同取締役社長に就任、川西地区果実共同加工組合代表就任。2010年7月に長野県中野市に、株式会社果実企画を設立、取締役就任。2016年12月に株式会社イチコト設立、取締役に就任。2020年4月に川西地区果実共同加工株式会社を設立、取締役に就任 (すべて現任)。全国農業会議所が事務局を務める経営者組織「農のふれあい交流経営者協会」副会長。



原 ゆきこ

税理士法人 共同経営センター 社員税理士

1968年生東京都出身。東京大学農学部農業経済学科卒業。夫の仕事に伴い、1998年より香川県在住。主婦業に専念した後、会計事務所に入社。学生時代よりの憧れだった農業経営者との触れ合いの中で、税理士資格の取得を決意。現在、顧問先は農業法人が多くを占めている。日本政策金融公庫の上級農業経営アドバイザー試験合格者、香川県新規就農・農業経営相談センター登録専門家として様々な農業経営者の相談に応じている。



池本 博則

株式会社ユニークピース 代表取締役社長

徳島県出身。2003年株式会社マイナビ入社。2016年同社執行役員 地域活性事業部長となり、2017年8月より農業情報総合サイト『マイナビ農業』を立ち上げる。日本の農業振興について官民双方へのサービス提供を通し取り組んだ。その後2023年5月末でマイナビを卒業し、2023年6月より株式会社ユニークピースを創業。現在も農業をテーマとした民間企業の事業開発や官公庁自治体における農業施策の支援など幅広く農業振興に取り組む。

表彰部門の紹介

令和7年度 表彰部門

A 女性地域社会参画部門（個人）

地域の農林水産業の振興及び農山漁村の活性化のための活動の中長期にわたり積極的に実施している個人（女性）の取り組み。



B 女性地域社会参画部門（組織）

農山漁村の女性が中心となった地域の農林水産業の振興及び農山漁村の活性化のための活動の中長期に渡り積極的に実施している団体・組織の取り組み。



C 女性登用・組織参画部門

政策・方針決定過程への女性の参画を推進するため、積極的に役員等への女性の登用や育成、その他の女性の活躍推進に取り組む個人（性別不問）や団体・組織の取り組み。



D 女性優良ビジネス部門

女性が農業、林業又は水産業の経営の中核を担い、経済的・社会的に優れた成果をあげている個人（女性）又は団体・組織の取り組み（必ずしも女性が農地法・会社法等上の代表である必要はない）。



E 女性新規事業・チャレンジ部門

女性ならではのアイデアに基づく新規事業の実施や自身の経営・活動のステップアップに向けて挑戦する概ね5年以内の個人（女性）又は団体・組織の取り組み。



F 女性活躍応援・次世代育成支援部門

農林水産分野における女性の新規就業や活躍を応援・支援する個人（性別不問）や団体・組織（行政機関を含む）の取り組み。



令和7年度受賞者紹介



- 農林水産大臣賞 女性地域社会参加部門(個人)**
埼玉県 越生町 **山口 由美**……………p6
- 農林水産大臣賞 女性地域社会参加部門(組織)**
長野県 小諸市 **味工房小諸すみれ**……………p11
- 農林水産大臣賞 女性登用・組織参画部門**
埼玉県 比企郡滑川町 **比企地域女性農業委員・農地利用最適化推進委員連絡会**……………p16
- 農林水産大臣賞 女性優良ビジネス部門**
大阪府 富田林市 **乾 裕佳**……………p19
- 農林水産大臣賞 女性新規事業・チャレンジ部門**
神奈川県 足柄上郡山北町 **花坂 薫**……………p22
- 農林水産大臣賞 女性活躍応援・次世代育成支援部門**
広島県 尾道市 **株式会社ジョージア園芸**……………p27



- 農林水産省経営局長賞 女性地域社会参画部門(個人)**
三重県 多気郡多気町 **中西 眞喜子**……………p7
- 農林水産省経営局長賞 女性地域社会参加部門(組織)**
熊本県 山鹿市 **幸の郷かほく**……………p12
- 農林水産省経営局長賞 女性登用・組織参画部門**
千葉県 東金市 **両総土地改良区**……………p17
- 農林水産省経営局長賞 女性優良ビジネス部門**
茨城県 猿島郡境町 **株式会社光ファーム 篠塚 朋子**……………p20
- 農林水産省経営局長賞 女性新規事業・チャレンジ部門**
青森県 西津軽郡鰺ヶ沢町 **株式会社SATO FARM**……………p23
- 林野庁長官賞 女性地域社会参画部門(組織)**
佐賀県 佐賀市 **佐賀市婦人林業研究会**……………p13
- 水産庁長官賞 女性新規事業・チャレンジ部門**
大分県 佐伯市 **水本 あゆみ**……………p24



- 全国農業協同組合中央会長賞 女性地域社会参画部門(個人)**
宮城県 加美郡加美町 **内海 光子**……………p8
- 全国漁業協同組合連合会長賞 女性地域社会参画部門(個人)**
宮城県 本吉郡南三陸町 **阿部 民子**……………p9
- 大日本水産会会長賞 女性新規事業・チャレンジ部門**
佐賀県 鹿島市 **松本 理絵**……………p25
- 農山漁村男女共同参画推進協議会長賞 女性地域社会参画部門(個人)**
愛知県 一宮市 **大島 美智子**……………p10
- 農山漁村男女共同参画推進協議会長賞 女性地域社会参画部門(組織)**
徳島県 吉野川市 **川島町生活改善グループ連絡協議会**……………p14
- 農山漁村男女共同参画推進協議会長賞 女性登用・組織参画部門**
山梨県 南アルプス市 **清水 景子**……………p18
- 農山漁村男女共同参画推進協議会長賞 女性優良ビジネス部門**
北海道 河西郡 芽室町 **鈴木 由加**……………p21
- 農山漁村男女共同参画推進協議会長賞 女性新規事業・チャレンジ部門**
富山県 魚津市 **稗苗 史絵**……………p26
- 審査委員特別賞 女性地域社会参画部門(組織)**
岩手県 釜石市 **釜石湾漁業協同組合白浜浦女性部**……………p15



農林水産大臣賞

越生の梅を未来へ 人と地域をつなぐ、 女性農業者の挑戦

「越生(おごせ)の梅を、もっと多くの人に知ってもらいたい」。家族、地域、農業——そのすべてと向き合いながら、梅農家として、経営者として、そして地域の担い手として歩んできた山口由美さん。越生の梅を軸に、人と人、地域と未来をつなぐ取り組みが、着実な広がりを見せている。



山口 由美さん(山口農園)

埼玉県入間郡越生町。活動継続14年5カ月

嫁として、母として。地域に根を張った20年

埼玉県越生町で100年以上続く梅農家「山口農園」に嫁ぎ、3人の子育てや家族の介護、子どもの大病と向き合いながら、地域に根差した暮らしを続けてきた山口さん。義父が倒れたことを機に農園経営を引き継ぎ、女性農業経営者としての歩みを始めた。「越生の梅を知ってもらいたい」。その思いが、すべての原点となっている。

「越生べに梅」のブランド化と販路拡大

「私が最も力を注いできたのは、在来品種『越生べに梅』のブランド化です」。販路拡大には知名度向上が不可欠と考え、ロゴ作成や商標登録に取り組んだ。その結果、百貨店などへ販路が広がり、現在は無印良品のオンラインショップでも取り扱われるなど、全国規模で周知されるようになった。



加工品の自家製造で海外展開も

「種が口に残って食べにくい」という声をヒントに、JA出荷中心だった経営から一歩踏み出し、梅の加工品の自家製造を開始。種を取り除いた「おにぎり梅」や「万能梅みそ」は、梅が苦手な人や外国人にも好評を博した。全国コンクールで高い評価を受け、平

成28年に香港、翌年には台湾、その後フランスへと、海外展開も進めている。

畑をつなぐ。後継者育成と産地再生

高齢化や耕作放棄地の増加という課題に対し、農地を三段階に分類し、新規就農者へつなぐ独自の仕組みを構築。20~30代の若手後継者育成にも取り組んできた。収穫・加工体験事業は年間約1,500人が参加する規模に成長し、園内の「梅凛caffe」は、若者の挑戦を後押しする場にもなっている。さらに、高校・大学・企業との連携、子ども食堂や農福連携など、農業を軸にした地域貢献を展開。「全国ウメ生産者女性サミット」の立ち上げを通じ、全国の女性生産者をつなぐ役割も担ってきた。



未来へ向けた決意

今後は、樹齢60年以上の梅の古木を丁寧に管理し、高品質な梅を安定して届けられる農園を目指します。農園体験の充実や新商品の開発、販路拡大に取り組み、農業を軸に人と人がつながる場を広げていきます。越生の梅を未来へつなぐため、これからも地域とともに歩み続けていきます。



評価のポイント

- 在来品種「越生べに梅」を軸とした、住民・生産者を巻き込む産地保全の取り組み
- 全国ウメ生産者女性サミットを立ち上げ、女性生産者の全国的な連携を構築
- 香港・台湾・フランスへの輸出など、海外展開への挑戦
- 若手就農者の育成と定着を見据えた仕組みづくり



経営局長賞

ご縁が力に変わるとき 勢和で育まれた仲間と 地域づくり

「地域づくりは、仲間づくり」。

家業の農業に向き合いながら、人のご縁を大切に、仲間とともに歩んできた中西眞喜子さん。伊勢イモの畑から始まったその歩みは、議会、文化活動、そして地域づくりへと広がり、勢和の人と人を結び続けている。



中西 眞喜子さん

三重県多気郡多気町

家族とともに守り続けた農業の現場

昭和45年、結婚を機に多気町丹生に入り、家族とともに水稲と伊勢イモの生産に携わってきた。伊勢イモは約300年前からこの地で栽培されてきた伝統野菜で、手間がかかり、効率化が難しい作物でもある。気象変動の影響を受ける厳しい状況が続く中、今も家族とともに生産活動を続けている。生産の中心は次世代が担っているが、培ってきた技術は新しい研修生へも伝えられている。



「農業・農村のセールスレディ」として

平成11年、三重県農村女性アドバイザーに認定。県内外の女性農業者と交流を重ねる中で、仲間からかけられた「私たちは農業・農村のセールスレディ」という言葉が心に残った。作るだけでなく、消費者と生産者をつなぐ存在でありたい。そんな思いで活動を続け、代表や世話人としてネットワークづくりにも尽力してきた。



ご縁を力に、地域の中へ

農業と並行して、婦人会や食生活改善、社会教育、行政相談員など、地域の暮らしに関わる役割を担ってきた。頼まれごとを「ご縁」と受け止め、一つひとつ真剣に向き合う。その積み重ねが、新たな仲間との出会いを生み、活動の幅を広げていった。勢和村議、合併後は多気町議員として3期11年。地域全体の課題に向き合った経験は、その後の地域づくりの礎となっている。こうした経験を重ねる中で、地域の歴史や人の営みを次世代へつなぐ拠点として、後に一般社団法人「ふるさと屋」の立ち上げにも関わることとなった。

舞台が結んだ、誇りと絆

地域活動を続ける中で、なじみの顔が減り、農にまつわる風習が失われていくことに寂しさを覚えた。そこで立ち上げたのが、立梅用水を築いた西村彦左衛門を題材にした「劇団ほてい葵」だ。大道具も衣装も手づくり。世代を超えた団員が一丸となり、30年続く舞台は、地域の誇りと人のつながりを育んできた。

未来へ向けた決意

議員退任後は立梅用水土地改良区の理事として、また一般社団法人ふるさと屋の代表として、みんなの活動拠点を作り、見守り活動や獣害対策、防災などに取り組んできました。令和4年からは農村RMO協議会の会長として、多様な団体と将来ビジョンを描いています。「地域づくりは仲間づくり」。これからも仲間とともに、「ここに住んでよかった」「住みたい」と思える勢和を、次の世代へつないでいきたいです。



評価のポイント

- 長年にわたって「農業・農村のセールスレディ」として消費者と生産者をつなぐ存在であり続けていること
- 多気町議員や土地改良区理事など地域の意思決定の場に参画しつつ、「劇団ほてい葵」の団長として30年以上にわたり文化をつなぐ活動も行ってきた点

A 女性地域社会参画部門(個人)

優良賞

全国農業協同組合中央会長賞

苗づくりを積み重ねて 信頼で広がる販路と人脈

水稲と花の栽培からスタートし、時代の変化を捉えながら野菜苗と花苗の生産へと歩みを進めてきた内海光子さん。庭先販売と量販店向けの契約販売を両立させ、「なえやさん内海農園」として地域に根を張ってきた。人と向き合い、今もなお学び続ける姿が、地域の活力になっている。



内海 光子さん

宮城県加美郡加美町

時流を読み、経営を変えてきた苗づくり

水稲と花栽培を中心としていた経営は、構造改善事業を契機に園芸品目へと舵を切った。きゅうりやトマトの栽培を経て、野菜苗と花苗の生産販売事業を本格化。平成8年には「なえやさん内海農園」を設立し、庭先販売と量販店向けの契約販売の二本柱で経営を築いてきた。良質な苗づくりが評価され、ホームセンターからの受注も拡大。現在は県内外15店舗への出荷を行っている。

庭先販売が育てた信頼関係

庭先販売は、単なる販売の場ではなく、地域の人が気軽に立ち寄り相談できる交流の場となった。「なぜ育たなかったのか」「どう管理すればよいのか」。そうした声の一つひとつ向き合い、地域の気候や土壌に合った栽培方法を丁寧に伝えてきた。失敗も成功も包み隠さず話す姿勢が信頼を生み、口コミで顧客層が広がっていった。庭先販売は終了したが、この経験は今も講習会や指導の場で生かされている。



記録と学びが支える安定した生産

20年以上にわたり、天候や作業内容、作物の状態をノートに記録し続けてきた。積み重ねられたデータは、近年の気候変動に対応するための貴重な資料となっている。人に教える立場となつてからは、美味安全野菜栽培士やガーデニング学習指導員などの資格も取得。古希を過ぎてもなお学び続ける姿勢が、周囲に良い刺激を与えている。

地域を支える女性リーダーとして

地域の農業を支えるため、産直組織「かあちゃんの会」で中心的役割を担い、栽培指導や売り場づくりに尽力してきた。会員全員でのエコファーマー認定取得に挑戦し、県内初の認定を受けるなど、環境保全型農業のモデルづくりにも貢献。講習会の講師として地域を回り、ズーズー弁も交えた親しみやすい語り口で、世代や立場に応じた伝え方を工夫している。



未来へ向けた決意

今、経営を次世代に託した内海さんが大切にしているのは、これまで支えてくれた人たちへの思いを忘れずに、地域やお客様に恩返ししていきたいです。学び続ける姿勢を忘れず、講習会や地域活動を通じて経験を伝えながら、下の世代が「まねしてみたい」と感じられる道を作っていきたいです。



評価のポイント

- 町で初の女性認定農業者として、時流を捉えた品目転換や庭先販売に挑戦してきた取り組み
- 産直組織「かあちゃんの会」やJ女性部でリーダーシップを発揮し、地域の活力を生み出している点

A 女性地域社会参画部門(個人)

優良賞

全国漁業協同組合連合会長賞

「たみこの海パック」に込めた、海とともに生きる選択

結婚を機に宮城県南三陸町戸倉地区へ移り住み、夫とともに養殖業に携わってきた阿部民子さん。東日本大震災で養殖施設のほとんどを失い、海に出られない時期を経験しながらも、「海に関わりたい」という思いを手放さなかった。その思いが、地域の仕事とつながりを生み出している。



阿部 民子さん

宮城県本吉郡南三陸町



震災で失ったものと、海への思い

震災前は夫と一緒に船に乗り、養殖業を支えてきた。だが津波でほぼすべてが流され、心が追いつかない日々が続いた。余震のたびに恐怖がよみがえり、町を離れたと思うこともあった。それでも「海に出なくても、海に関わる仕事を」と模索を続けていると、震災前、知人に海産物の詰め合わせを送っていたことを思い出す。ボランティアのかたや家族から「その経験を活かして通販サイト、やってみたら?」「できるんでないの?」と背中を押された。

「たみこの海パック」立ち上げと、手探りの一年



2012年10月、通信販売サイト「たみこの海パック」を立ち上げた。事務所づくりから備品調達、事業計画、補助金申請、パソコン操作やWEB、SNSまで、すべてが初めて尽くしだった。震災後、復興の早かった水産加工場から

商品を仕入れ、海産物の詰め合わせ販売を開始。仕入れ先は当初4社だったが、いつしか13社へと広がった。立ち上げから約一年、借入金の不安から涙することもあったが、家族の支えと人のつながりで、乗り越えることができた。

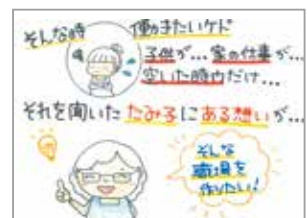
体験を通して伝える、海と漁業の価値

海産物が育つ様子や漁業者の思いを伝えるため、震災で残った漁船を使った「漁業体験ツアー」を実施。紙芝居を用い、海を守ることと食のつながりを丁寧に伝えている。

また、規格外の海藻を活用した「海藻ふりかけワークショップ」も企画。天候に左右されず実施でき、学校や企業、海外からの参加者にも広がった。コロナ禍には体験キットを開発し、オンライン講座へと形を変えて継続している。

女性が働きやすい環境づくり

事業の拡大とともに、子育て世代を中心とした雇用の場も整えてきた。短時間勤務など柔軟な働き方を取り入れ、女性スタッフの発想から生まれた商品が「たみこの楽ちんわかめ」だ。こうした取り組みを積み重ねた結果、売上は令和3年に震災前平均の約18倍に達している。



未来へ向けた決意

海水温の上昇や担い手不足などの課題があります。海産物を守り食につなげる大切さを伝え続けていくことや、女性が働きやすい環境を整え、「自分の時間」を持てる豊かさも広げていくことが解決の糸口になると考えています。後継者が生き生きと輝き、浜に活気と笑顔が広がる未来へ向けて、できることを一つずつ積み重ねていきます。



評価のポイント

- 震災後、家族の支えを受けながら再び水産業に関わり、新たな取り組みに挑戦してきた点
- 海産物の小売りや規格外品の活用、オンライン販売、体験ツアーなど、多角的に水産業の魅力を事業化している取り組み
- 売上を震災前の約18倍に拡大し、雇用創出と女性の活躍に貢献してきた実績



女性だけで完結できる 農業のかたち

母に誘われ、地域ではまだ珍しかったイチジク栽培に挑んだ大島美智子さん。

完熟の美味しさを大切にしたい農業経営と、長年にわたり続けてきた食農教育への取り組みは、農業と地域、そして次の世代を静かに結び続けてきた。女性の視点を生かした一つひとつの選択が、地域に確かなかたちを残している。



大島 美智子さん

愛知県一宮市



母と歩んだ、イチジクから始まる農業

農村生活アドバイザーとして地域に関わる母に誘われ、大島さんは父の露地野菜経営に新たな部門としてイチジクを加え、就農した。当時、周囲ではまだ例の少なかったイチジク栽培。だが「女性の力だけで完結できる農業」という母の考えに共感し、母娘二人三脚で栽培に取り組んできた。試行錯誤を重ねながら規模を広げてきた。



完熟の美味しさを、価値として届ける

大島さんが大切にしてきたのは、イチジク本来の食味だった。完熟すると日持ちがせず、かつては流通に乗りにくかったイチジク。しかし「美味しいものを、いちばん美味しい状態で届けたい」と、朝採り完熟果に絞った販売を選んだ。



配送範囲を限定した直販の工夫は、百貨店やホテルラウンジ、機内食の素材として採用されるほどの高い



評価につながり、食味を軸にした新たな価値を生み出している。

加工と食農教育が広げた、社会とのつながり

完熟出荷に伴い生じる規格外果も無駄にしないよう、早くから加工に取り組んできた。食品衛生責任者として知識を積み重ね、ジャムやグラッセなどの加工品を開発。こうした経験は、地域の食品加工現場を支える指導にも生かされている。

また平成11年からは、地元小学校で大豆栽培や豆腐・味噌づくりを通じた食農教育を開始。生産者、市教育委員、愛知県農村生活アドバイザーと立場を変えながら関わり、20年間で延べ5,600人以上の児童が参加した。活動を続ける中で、「立場や肩書きが、人を次の一歩へ導く」という思いを強くした。



未来へ向けた決意

園地の更新や後継者育成に取り組みながら、小学校での食農教育を、地域に根づかせていきたいです。イチジク経営を軸に、農業と教育、地域と行政をつないできたこれまでの経験を生かし、農が自然に続いていく地域の姿を、これからも丁寧に支えていきます。



評価のポイント

- 「女性だけで完結できるイチジク経営」を掲げ、完熟果の朝どり直送を軸に生産・加工・流通を一体で設計した点
- 教育委員などの立場を通じ、農業にとどまらず地域課題に向き合ってきた取り組み
- 地域を越えて、県域の女性や次世代に与えた影響の大きさ



農林水産大臣賞

「母の味」で地域を結ぶ 女性たちが築いた 食の拠点

直売所に並びきらなかった野菜や、自分たちで育てた農産物を無駄にしたい。

そんな農村女性たちの思いから始まった「味工房小諸すみれ」。地元食材にこだわった加工品づくりを通じて、地産地消の推進と女性の社会参画を実現してきた活動は、今や地域に欠かせない存在となっている。

余剰野菜から始まった、ものづくりの輪

「味工房小諸すみれ」(以下「すみれ」)は平成17年、農村女性活動推進委員や直売所に関わる女性たちによって創設された。余ったキュウリやナスの漬物や自家栽培の米や大豆で作った味噌、手作りのおやきなどの魅力をより多くの人々に知ってもらいたい、という思いからである。販売目的の加工施設が無かったため、市へ要望。平成18年に「小諸市農産物加工施設」が開設され、「すみれ」は指定管理者として運営を担い、本格的な加工・販売体制が整えられた。

味噌・漬物・惣菜 三本柱のものづくり

活動の柱は、味噌・漬物・惣菜の三部門。

味噌は、会員や地元農家による契約栽培の大豆と米を使用し、昔ながらの製法で仕込んでいる。漬物は直売所の余剰野菜を活用し、福神漬けや季節の浅漬けを製造。摘果した桃を使った「桃っ娘福神漬」など、「すみれ」ならではの商品も生まれている。惣菜は冷凍食品に頼らず、すべて手作り。「懐かしくて安心する味」と人気がある。「母の味」をモットーに、直売所や学校給食、イベント出店など販路を広げている。



食育と伝統料理で次世代につなぐ

平成24年頃から、小学校や保育園で豆腐づくりや味噌づくり教室を実施。子どもたちが栽培、収穫した大豆を使うことで、食と



味工房小諸すみれ

長野県小諸市。活動継続20年

農のつながりを実感することができる。

また、伝統料理講習会を毎月開催。おやきや野沢菜漬けなど、郷土の味を伝える役割を果たしている。近年は市外からの参加も増え、交流の場として広がっている。

生きがいと社会参画を生む場に

「すみれ」の活動は、農村女性の雇用創出と経済的自立にもつながっている。

加工や商品開発の経験を通して、経営やリーダーシップを身につけたことで、市議会議員や農業委員、農村生活マイスターとして活躍する会員も誕生。女性の社会参画を広げる拠点となり、生きがいも生み出している。



未来へ向けた決意

会員の高齢化や原材料確保などの課題に向き合いながら、新規会員の勧誘や技術継承、SNSを活用した情報発信に取り組みます。新たに「瓶詰製造」への挑戦も視野に、「母の味」を守りながら、地域とともに歩み続けていきます。



評価のポイント

- 料理教室や伝統料理講習会を長年にわたり継続して実施
- 加工品の安定した生産・販売により、年間売上1,500万円を達成
- 70名以上の会員が参画し、地域を巻き込んだ継承体制を構築



経営局長賞

「ないものねだりより、 あるものさがし」 岳間の食を伝え続けて

「おいしいものを作って、食べた人に喜んでもらいたい」。その思いを大切に、岳間で農産加工と郷土料理の発信を続けてきた「幸の郷かほく」。

団子や郷土料理、料理教室を通して地域の食を伝え、人と人のつながりを育ててきた取り組みは、過疎化が進む地域に新たな人の流れを生み出している。

竹細工から始まった、小さな一歩

平成2年、古田美生子さんと弓掛啓子さんを中心に活動が始まった。当初は竹細工の継承が目的だったが、農協の朝市への参加をきっかけに、農産加工へと舵を切る。団子やこんにやくなど、岳間で採れる農産物を生かした手作りの味は評判を呼び、活動は次第に広がっていった。

「おふくろ味」が観光地になった日

平成9年、町長からレストラン運営の打診を受ける。経験もなく、地域の一大事業という重圧もあったが、「おいしいもので人を笑顔にしたい」という原点を信じて挑戦した。翌年オープンした「お栗茶屋」は、全員女性スタッフ。朝、物産館で野菜を買い、その日のうちに料理するカフェテリア方式は瞬く間に人気となり、何も無いと言われた地域に人が集う場所が生まれた。



食を伝える人として

2人はそれぞれ「くまもとふるさと食の名人」に認定され、小中学校での料理指導や講話を開始。平成28年からは廃校となった旧岳間小学校を活用し、「うまかもん教室」を毎月開催している。10年続く教室には県内外から参加者が訪れ、岳間の食と暮らしに触れ、ファンになって帰っていく。



幸の郷かほく

熊本県山鹿市

ないものねだりより、あるものさがし

少子高齢化が進む岳間で、2人が大切にしてきたのは「あるもの」に目を向けることだった。自然、農産物、人柄、歴史。平均年齢70代ながらSNSも学び、自ら発信を続ける。福岡の自然食品店との20年に及ぶ取引や、東京マルシェへの出店も、岳間の味を外へ届ける一歩となった。



未来へ向けた決意

活動は35年を超え、今は次の世代へどう手渡すかが課題です。料理教室を通じて意欲ある人と丁寧につながり、技術と想いを伝えていきます。「自分たちが楽しめているか」を何より大切にしながら、食で人をつなぎ、岳間に人が戻る未来を目指します。



評価のポイント

- 農家レストランを35年にわたり継続してきた点
- 未利用資源や廃校を活用し、「あるものさがし」で限界集落に向き合ってきた姿勢
- SNSを活用した情報発信により、関係人口の増加に取り組んでいる点



林野庁長官賞

山の恵を再発掘 人と地域をつなぐ 女性たちの挑戦

一度は途絶えかけた、山の中の伝統素材。それをもう一度掘り起こし、商品にし、人の手に届けてきた女性たちがいる。

山と海、人と人をつなぐ佐賀市婦人林業研究会の取り組みは、地域に新たな価値とつながりを生み出してきた。

「山を守る人を応援したい」という思いから始まった活動

平成8年、富士町女性林業研究グループとして発足した当会は、「林業を頑張るお父さんを応援しよう」「次世代に山の大切さを伝えよう」を合言葉に、町内の仲間が集まりスタートした。山に暮らす人だけでなく、町に住む人や有明海で海苔業を営む人々も加わり、活動の輪は次第に広がっていった。林業を軸に、地域全体で山と向き合う姿勢が、この会の原点となっている。

幻の「ゆり粉」をたどる、手探りの研究

富士町には、ウバユリの球根から採れるゆり粉を使った「ゆり菓子」という古湯温泉の銘菓があった。しかし、高度成長期以降、ゆり粉を採る人は途絶えていた。そこで当会は、地域の伝統文化の再発掘、新たな特産品としての可能性、山林美化を目的に、ウバユリの研究を開始。地域の高齢者の記憶をたどりながら、採取や精製方法の一つひとつ確かめていった。



試行錯誤の末、商品化

当初は5kgの球根からわずか200gほどしか採れなかったゆり粉も、採取時期を初夏に変え、製法を見直すことで大幅に改善。老舗葛粉店への視察などを重ね、安定した品質へと近づけて



佐賀市婦人林業研究会

佐賀県佐賀市

いった。クラウドファンディングを活用し、地元菓子店と連携して干菓子「ゆり湯」を商品化。その後も検討を重ね、令和6年には、里山の素材を生かした「ユリコ浪漫」を数量限定で販売している。



山と海を結ぶ、地域連携の広がり

活動はウバユリ研究にとどまらない。有明海の手付業者と連携した「佃煮のり」「柚子のり」の商品化や、椎茸の菌打ち研修を通じた交流など、山と海の恵みを生かした取り組みを展開してきた。「柚子のり」は海外での販売も実現し、地域の素材が新たな価値を持って発信されている。これらの活動は、全国林業グループコンクールでの受賞など高い評価にもつながっている。



未来へ向けた決意

今後は、「ユリコ浪漫」を継続して届けるため、ウバユリの栽培方法の確立に力を注いでいきます。あわせて、世代や立場を超えた仲間づくりを進め、山の魅力を伝える活動を続けていきたいです。若い世代の刺激を受けながら、富士町の自然と文化を守り、次の世代へとつないでいくことを目指しています。



評価のポイント

- 平成8年の発足以降、椎茸菌打ち研修会などを継続し、山・町・海の仲間を巻き込みながら活動を広げてきた取り組み
- 伝統のウバユリの商品開発・販売を通じ、地域の伝統文化の継承に寄与している点



規格外から生まれた 地域の誇り 「焼き肉のタレ」

昭和55年、川島町で始まった女性たちの生活改善の取り組み。その活動は、やがて規格外ニンニクを生かした「焼き肉のタレ」づくりへと発展した。40年以上にわたり、味を変えずに守り続けている。



川島町生活改善グループ連絡協議会

徳島県吉野川市

規格外ニンニクから始まった挑戦



昭和55年、地域の女性たちによって「川島町生活改善グループ連絡協議会」が結成された。

台所改善や郷土料理の継承に取り組む中、旧川島町農協組合長の提案をきっかけに、出荷時に生じる規格外ニンニクを活用した「焼き肉のタレ」

の製造・販売が始まった。

以来40年以上、原材料や製法を変えることなく、「本物の味」を守る姿勢を貫いている。

味を変えないという選択

ハチミツやごま油など原材料価格が上昇する中でも、安価な代替品には頼らない。

採算よりも「味を守る」ことを優先する姿勢は、消費者からの厚い信頼につながってきた。



現在では県内外のスーパーや直売所、サービスエリア、精肉店、ふるさと納税返礼品としても取り扱われ、「川島町といえば焼き肉のタレ」と言われるまでに成長している。

生きがいと健康を支える共同作業

タレづくりは、単なる商品製造にとどまらない。

定期的集まり、仲間と協力して作業を行うこと自体が、会員の

生きがいや健康の源となっている。平均年齢75歳。「元気でいられるのは、この活動があるから」という会長は、85歳を迎えてなお現役で活動している。

地域と次世代への広がり

活動は地域貢献にも大きな広がりを見せている。規格外ニンニクの有効活用は農家の収入確保につながり、農産物廃棄の削減にも寄与。さらに、小学3年生を対象にしたニンニク栽培からタレ製造までの出前授業を通じ、食と農の大切さを次世代へ伝えている。子どもたちが地域資源に触れる体験があることは、地域の未来を支える基盤になると考えている。



未来へ向けた決意

高齢化により、ニンニクの栽培面積が縮小し、原材料も減少しています。加えて会員の高齢化により活動継続の難しさも生じています。この現状を打破するため、若い世代が少しずつ関わり始め、次の形を模索する動きが生まれています。「味は変えず、積極的に人材育成と作業負担の軽減を進める。」誇りの味を守りながら、次の世代へ確実に手渡していきたいです。



評価のポイント

- 地域特産の規格外にんにくを活用し、「焼き肉のタレ」を長年製造・販売してきた取り組み
- 40年以上レシピを変えず、安心・安全なふるさとの味を守り、食農教育を通じて次世代にも継承
- ふるさと納税返礼品などを通じ、地域ブランドとしての認知を確立

優良賞

審査委員特別賞

あかもくパワーで 岩手から元気を

東日本大震災後、全国で力強く活動する女性たちとの交流を通じて、「自分たちでも何かしよう！ 浜を活気づけよう！」。そんな思いが、釜石湾漁業協同組合白浜浦女性部の中で高まっていった。未利用資源だったあかもくに光を当て、学び、試し、工夫を重ねながら、浜の元気を取り戻す取り組みが続いている。

視察で気づいた、足元の海の資源

白浜浦女性部は、尾崎白浜地区と佐須地区の部員で構成され、震災後、魚食普及を中心に活動を続けてきた。ワカメの中芯を使った佃煮など、浜の資源を生かした加工品づくりに取り組む中で、2015年の先進地視察が転機となる。山口県で知った「あかもく」が、実は釜石の海にも多く自生し、「ズル藻」と呼ばれてきた海藻と同じものであることに気づいた。厄介者とされてきた存在に、新たな価値を見いだしたことが、あかもく加工品開発の出発点となった。

未利用資源・あかもくへの挑戦

あかもくは、抗酸化作用や高血圧抑制作用が期待される機能性食材でありながら、これまで十分に活用されてこなかった。女性部では、まず基本的な生態を学ぶ勉強会からスタート。初年度は収穫時期を誤り、ほとんどが商品にならない苦い経験もしたが、翌年以降は漁協青年部等の協力を得て成熟度の調査を重ね、加工に適した良質な原料を確保できるようになった。こうして誕生したのが、湯通し刻みあかもく「尾崎さんちのあかもく」である。



釜石湾漁業協同組合白浜浦女性部

岩手県釜石市。昭和34年4月1日結成

試行錯誤が生んだ、浜の味

加工工程では、刻んだあかもくの充填の難しさなど、想定外の課題も多かった。部員たちは器具を工夫し、工程を見直しながら、一つひとつ乗り越えていった。

2019年から市内施設での販売を開始すると、品質の高さが評価され、加工品コンクールでの受賞や、ふるさと納税返礼品への採用にもつながった。さらに、「持ち運びしやすい商品をと」考え、常温保存できるあかもくふりかけの開発にも挑戦。2023年には一般販売を実現し、浜の味がより多くの人に届くようになった。



あかもく



未来へ向けた決意

震災後、「被災した地元を何とか元気にしたい」という思いで続けてきた女性部活動は、いまや部員の生きがいの一つとなっています。原料確保や部員の高齢化といった課題はありますが、無理のない形で活動を続けながら、食を通じて人と人をつなぎ、浜に元気を取り戻していきたいです。「忙しかったけど、ちょっと楽しかったよね」。そんな振り返りができる女性部活動を、これからも模索していきます。



評価のポイント

- 未利用資源であったあかもくに着目し、生態の学習から商品化まで粘り強く取り組み、継続的な販売につなげている取り組み
- 商品開発を通じた交流が、女性部員の意欲向上や社会参画の促進につながっている



農林水産大臣賞

声を重ね、席を増やす 女性参画を 積み上げた20年

「農業の現場に、もっと女性の声を」。
その思いを胸に、20年以上にわたり活動を続けてきた比企地域女性農業委員・農地利用最適化推進委員連絡会。市町村を越えた連携と粘り強い働きかけにより、地域の農政に確かな変化をもたらしている。

女性農業委員が少なかった時代から

連絡会は平成16年、吉見町・滑川町・嵐山町・小川町・鳩山町の5町、女性農業委員10名で発足した。当時は女性委員が極めて少なく、まずは自らの資質向上を目指し、農業関連施設の視察や情報交換を重ねてきた。毎年、活動報告書を関係機関へ提出し、女性委員の必要性を地道に訴え続けたことが、後の大きな流れにつながっている。

市町村長へ直接要請 登用を現実に

活動は次第に、市町村長を訪問して女性登用を要請する実践的な取り組みへと発展した。任期満了を迎える自治体を一つ一つ訪ね、要望書を手渡ししながら懇談を実施。農業分野における女性参画の重要性を丁寧に伝えてきた。その結果、令和3年度以降、管内9市町村全体で20名以上の女性が農業委員・推進委員として登用されている。



数字が示す確かな成果

現在、比企地域の女性農業委員比率は20%となっている。全国平均14.4%、県平均15%を上回る水準である。嵐山町では37.5%、鳩山町では33.3%と、国の目標である「30%以上」を既に達成。東松山市・小川町・東秩父村では、女性が農業委員会長を務めている。



比企地域女性農業委員・ 農地利用最適化推進委員連絡会

埼玉県比企郡滑川町

組織参画が生んだ変化と学び合い

女性の登用が進んだことで、会では多様な視点からの意見交換が活発になり、地域課題への対応力が高まっている。会員同士が活動を学び合う場として「座卓研修会」を開催。東松山市での農地中間管理事業を活用した農地集積・集約の取り組みや、小川町での遊休農地を活用したごま栽培など、各地の実践を共有している。こうした学びが、各地域での活動改善や新たな取り組みにつながっている。

人を育て、次世代へつなぐ

会では、新任・若手委員をベテランが支える育成体制を構築。研修会や講演活動を通じて資質向上を図り、地域農業のリーダーとして活躍できる力を磨いている。女性の声が農政に反映される社会を目指し、今後も登用促進と人材育成に取り組み、地域とともに歩み続けていく。



未来へ向けた決意

女性の声が農政に反映される社会を目指し、今後も登用促進と人材育成に取り組み、地域とともに歩み、次の世代へつなぐ活動を続けていきます。



評価のポイント

- 女性農業委員比率20%と、全国平均を5%以上上回る成果
- 女性の登用促進に加え、意見交換の場づくりなど男女ともに輝ける地域づくりへの貢献
- 新任委員を支える後継者育成の取り組み



経営局長賞

多様な力で支える 地域農業のこれから

利根川の水を広い農地へ届け、地域の農業を支えてきた両総土地改良区。

施設管理や農地の調整といった役割を担う中、将来の農業を見据え、女性理事の登用という新しい一歩を踏み出した。

多様な視点を取り入れながら、地域農業を支える取り組みが着実に進んでいる。



両総土地改良区

千葉県東金市



し、令和6年10月に3名の女性理事が誕生した。

選出にあたっては、各地域の農業事情に精通する現役員が協議と説得を重ねて人選を行い、「女性だから」ではなく理事にふさわしい人材が選ばれたと感じている。現在、女性理事は組織運営や財政運営に参画し、多角的な視点からの発言が理事会の活性化や多様性意識の向上につながっている。

地域とともに歩む取り組み

同区は施設管理だけでなく、産業祭でのPR活動や外来水生植物の駆除など、地域住民や関係団体と協力した活動にも力を入れている。農業の役割や土地改良区の仕事を伝えながら、地域とともに農業を守る仕組みづくりを進めている。

農業を支える、水を管理する仕事

両総土地改良区は、千葉県内の広い地域に農業用水を届け、農業生産の基盤を支えてきた。用水期には揚水機場が昼夜稼働し、職員が24時間体制で施設の運転や点検を行う。施設の老朽化や維持管理費の増加に対応するため「両総10年計画」を策定し、経営の安定化に取り組んできた。また、多面的機能支払活動の事務受託や農地の貸し借り支援を通じて、地域農業を守る役割も担っている。

女性理事登用への歩み

地域農業を将来にわたり持続させるには、多様な意見が欠かせない。そうした考えから女性理事の登用が始まった。令和5年に検討委員会を設置し、全国の事例を参考に協議を重ね、女性理事の割合10%以上を目標に掲げた。各地区から1名ずつ選出



未来へ向けた決意

農業は、人々の暮らしを支える大切な基盤です。両総土地改良区は、農業用施設の維持と生産基盤の整備を着実に進め、農家が安心して営農できる環境を守っていきます。今後は女性理事の割合15%以上を目指し、多様な視点を生かしながら、地域農業の持続と食料の安定供給を支えていきます。



評価のポイント

- 女性割合10%という目標を、女性理事3名の登用という形で2024年時点で達成したこと
- 地域農業の持続的な発展には女性の力が必要であることを組織として認識し、登用の取り組みを行ったこと



女性が加わり動き出す 土地改良区の変化

釜無川の水を農地へ届け、地域の営農を支えてきた四ヶ村堰土地改良区。近年、女性の耕作者が増えるなか、組織にも女性の視点を取り入れようと、員外監事や理事への登用が進められてきた。一人の登用をきっかけに、少しずつ広がった変化は、組織と地域の新しい力となりつつある。



清水 景子さん
山梨県南アルプス市



農業と暮らしを支える水の管理

四ヶ村堰土地改良区は、釜無川から農業用水・生活用水・防火用水を取水し、南アルプス市内約257haの農地を支えている。取水口の土砂除去や用水路の維持管理、草刈りなどを通じて、農業生産の基盤を守る役割を担ってきた。役員は全国大会や研修に参加し、先進事例を学びながら組織の発展に取り組んでいる。

女性登用への第一歩

これまで理事・監事は男性中心だったが、女性耕作者の増加を背景に、女性の視点を取り入れる必要性が高まった。研修で女性登用の重要性を学び、令和4年に員外監事として清水景子さんを登用。会計処理の透明化や会議の活性化など、組織に新たな変化をもたらした。さらに令和6年には女性理事1名と女性総代2名が就任し、女性の参画が広がり始めた。



一人の存在が広げた変化

清水さんは当初、「経験がない」と戸惑いながらも、今後の女性登用のためになるならと、「なんとかやってみます」と役割を引き受けた。県の職員としての経験を生かし、監査方法の見直しや会議運営に関わっている。女性が加わったことで、理事会や監事会

は引き締め、議論が簡潔に進むようになった。「一人いるかないかで大きく違う」という声もあり、女性役員の存在が次の登用を後押ししている。

地域に理解を広げる役割

女性理事には、地域の女性が集まる場で土地改良区の役割や水の仕組みを伝えてもらうことも期待されている。水は地域全体で守るもの。女性の参画により、こうした理解が広がり、組織への関心も高まりつつある。今後は女性理事2名体制を目指し、さらなる参画を進めていく。



未来へ向けた決意

四ヶ村堰土地改良区の受益地は水田と果樹が中心で、ぶどうや桃、すももなどの栽培が盛んです。これからも安定した用水を確保し、高品質な農産物を消費者へ届けることで、農家の暮らしを支えていきます。女性の力も生かしながら、水と農業を守り、地域の未来につなげていきます。



評価のポイント

- 理事に占める女性割合10%を目標に、員外監事制度を活用した女性登用の取り組み
- 女性監事の登用により、会計処理の合理化や組織運営の改善に寄与
- 令和6年度には女性理事も誕生し、地域における女性活躍を広げる組織としての役割



農林水産大臣賞

人を大切にする経営を軸に、 地域農業の未来を切り拓く

「やりがいのある職場をつくり、従業員の夢と幸せを実現したい」。そんな思いを胸に、富田林市で農業経営に取り組んできた乾裕佳さん。

2023年には乾農園の「富田林の千両なす」が大阪府内で初めて機能性表示食品として受理され、「富田林の海老芋」は府内初のGI認証を取得。人を大切にする経営を軸に、地域農業の未来を切り拓く取り組みが、着実な広がりを見せている。



photo:H.Yamamoto

乾 裕佳さん

大阪府富田林市

代々の農園を受け継ぎ、地域農業の中核に

乾農園は1930年創業。裕佳さんは4代目として農園を継ぎ、2015年から経営の中心を担っている。特産のなすやきゅうり、海老芋の生産を拡大し、都市開発で担い手のいない農地も積極的に借り受けてきた。現在は約300 a



の農地を管理し、安定した生産体制を確立。地域農業の中核を担う存在として、産地の維持と発展に貢献している。

経営改善と働きやすい職場づくり

裕佳さんは農業ビジネススクールで経営を学び、農園改革に着手した。父親の骨折をきっかけに作業の属人化に課題を感じ、マニュアル化や情報共有の仕組みを整備。外国人技能実習生やベトナム人研修生の受け入れ、女性が働きやすい環境整備にも力を入れた。その結果、J-GAP認証を取得。スマートフォンで入力できる生産管理ツール導入により、作業効率向上とミス防止を実現し、誰もが安心して働ける職場を築いている。

「乾ブランド」の確立と販路拡大

地域の伝統野菜である海老芋は、生産者減少により存続が危ぶまれていた。裕佳さんは収量や品質向上に取り組むとともに、テレビや新聞などを活用し認知度向上に尽力。地域農家や関係者と力を合わせ、「富田林の海老芋」は大阪府初のGI認証を取得

するに至った。「富田林の千両なす」は大阪府内で初めて機能性表示食品として受理され、地元スーパーや直売所で販売。規格外品を加工品として活用し、廃棄削減と収益向上にもつなげた。こうした積み重ねが販路拡大とブランド力向上につながり、2024年には販売額1億円を達成した。



担い手育成と地域への広がり

裕佳さんは就農希望者向け研修プログラムを提供する「きらめき農業塾」の立ち上げに携わり、地域農家とともに就農希望者へ技術や経営ノウハウを伝えている。また、農業に関わる女性の交流会も開催。立場を超えた意見交換の場を作ってきた。大阪府「農の匠」に認定され、全国の農業者と交流する中で、地域貢献への思いがさらに強まっている。

未来へ向けた決意

今後は従業員の定着率向上と育成体制の確立が課題です。地域農家と連携し、従業員を共有する仕組みづくりも検討しています。さらに、子どもを対象とした農業体験を実施し、「農業は楽しい」という意識を育む食育活動にも取り組みます。地域や全国のネットワークを活かし、持続可能で活力ある農業モデルを築きながら、伝統野菜を次世代へつないでいきます。



評価のポイント

- 自社ブランド野菜の栽培に加え、機能性表示食品の認証取得など、新たなビジネス展開に挑戦
- 「販売額1億円」という明確な目標を掲げ、実際に達成した経営力
- 経営や生産のノウハウを惜しみなく後進に伝え、担い手育成に貢献



経営局長賞

100年続く経営へ。 人事評価制度は 「会社の育児書」

「人が育てば、会社も育つ」。

その言葉を実感として形にしてきたのが、米・麦・そばを大規模に生産する光ファームの専務取締役、篠塚朋子さんだ。

JGAPの導入と独自の人事評価制度を軸に、従業員一人ひとりが考え、動き、成長する農業経営を築いてきた。その歩みは、地域の農地を守り続けるための挑戦でもある。



篠塚 朋子さん(株光ファーム)

茨城県猿島郡境町

家業から企業へ

県立農業大学校を卒業後、市役所に14年間勤務しながら農家に嫁いだ篠塚さん。子育てを経て農業経営に本格的に関わるようになった頃、経営は急速に拡大していた。従業員を雇い、将来にわたり地域の農地を守るためには、「人に任せられる経営」への転換が不可欠だった。2018年、法人化を機に、経営の土台づくりが始まった。



仕事を「見える化」したJGAP導入

最初に取り組んだのがJGAPだった。作業工程を洗い出し、リスクや役割を整理することで、仕事は誰にでも分かる形になった。「何を、どこまでやればよいのか」が明確になり、従業員は迷わず行動できるようになった。指導する側も、感覚ではなく基準をもって伝えられるようになり、現場の空気が変わっていった。

従業員の行動が変わり、現場が動き出す



変化は日常の風景に表れた。農機の保管を任せると、従業員同士が話し合い、最適な整理方法を自分たちで決定。農機具は常に清掃され、整然と並ぶようになった。人事評価制度の導入後

は、定期的な面談を通じて「求められる仕事のレベル」を共有し、納得のうえで評価を決定するようになった。控えめだった従業員が「リーダーをやってみよう」と意思表示するなど、主体性も育っている。人が育つことで、常時雇用は1人から5人へ、作付面積は120haから144haへと広がった。

人を育てる仕組みが、地域へ広がる

この仕組みは社内にとどまらなかった。県内外での講演や研修の依頼が相次ぎ、人事評価制度を参考にしている農業者も増えている。「人手不足の時代だからこそ、人を育てる経営が必要」。その考え方は、地域や行政にも波及しつつある。人を育てるためにつくった仕組みは、いつしか「会社の育児書」となった。



未来へ向けた決意

篠塚さんが見据えるのは、「100年続く経営」です。将来は200ha規模へと成長させ、経営を安心して任せられる人材を育てたいと考えています。「会社が自走できたときが、私の役目の終わり」。人とともに育つ農業経営で、これからも地域の農地と未来を支えていきます。



評価のポイント

- 農地面積140ha超の地域の中核的な法人において、専務として手腕を発揮
- JGAP指導員資格を取得し、認証取得を自ら主導してきた点
- 人事評価制度づくりなど、農業界のモデル的存在である



「半径5メートル」の応援団 すずきっちゃんのお惣菜

結婚を機に専業農家として農業に携わった鈴木由加さん。2001年、規格外野菜を使った惣菜や乾燥野菜を製造・販売する農産物加工施設「すずきっちゃん」を立ち上げ、無添加の冷凍総菜を届けてきた。忙しい日々を支える“家庭の味”は、20年以上にわたり地域の暮らしに寄り添い続けている。



鈴木 由加さん

北海道芽室町。活動年数25年



「自分の足で立つ」実感を求めて

就農後、農家の主婦として日々を回しながらも、「責任分野がなく、地に足がついていない」と感じる事があった。1999

年、女性農業者の養成講座で全国の女性たちの取り組みに触れ、「自分の責任で取り組める仕事を持ちたい」と考えるようになる。その中で着目したのが、出荷できずに埋もれてしまう規格外野菜の存在だった。2001年、規格外野菜を使った惣菜や乾燥野菜を製造・販売する農産物加工施設「すずきっちゃん」を開業し、自分の仕事を形にしていた。

忙しい“お母さん”の応援団になりたい

「すずきっちゃん」の軸は、ミートソースや切り干し大根など、食卓になじむ家庭料理だ。

農作業と家事を両立してきた自身の経験から、子育てや介護、仕事で時間のない人が「温めるだけでほっとできる」商品を目指してきた。派手さはないが、毎日の暮らしに寄り添う味が、20年以上にわたり支持され続けている。



ネット販売から、地域の店頭へ

当初はホームページを作り、ネット販売にも挑戦した。しかし、受注や発送に追われる中で「何が一番大切か」を見直すようになったという。たどり着いた答えが、「半径5メートルのお客さん

を大切にしたい」という思いだった。現在はネット販売を終え、ファーマーズマーケット愛菜屋や地域のスーパーで販売し、地域住民が気軽に手に取れる形を選んでいる。

商品が生んだ、新しいつながり

加工を始めてから、商品を通じて思いがけない出会いが生まれるようになった。大阪の高校から学校祭用の「いも餅」製造を依頼され、試作と改良を重ねて完成させたところ、後日その高校生が修学旅行で芽室町を訪ねてくれた。畑に向き合うだけでは得られなかった交流が、地域を知ってもらう入口になっている。



また、北海道指導農業士として町の食農教育にも関わり、子どもたちの農業理解の促進に力を注ぐ。JICA草の根支援では中南米の研修生を受け入れ、令和5年2月にはエルサルバドルを訪問し、現地の女性たちと生活改善をテーマに交流を行った。

未来へ向けた決意

いまの課題は、人手の確保と事業の継承です。加工に加え、施設を活用した食農体験も続けており、今後は対象を町内の小中学生へ少しずつ広げていきたいと考えています。町内産大豆を使った味噌づくりを、学校給食につなげられないか――。身近な家庭の味を大切にしながら、できることを一つずつ積み重ねていきます。



評価のポイント

- 「すずきっちゃん」として、冷凍総菜や乾燥野菜の製造販売を20年以上継続している取り組み
- 指導農業士や全国女性起業経営者ネットワークの幹事長などの立場を通じ、農業の活性化に寄与

最優秀賞

農林水産大臣賞

牛とともに山を守る酪農 小さく始めて持続する 経営モデル

「牛の力を借りて、山づくりをしたい」。

そんな思いから神奈川県山北町へ移住し、県内初となる“山地酪農”に挑戦した花坂薫さん。放牧から加工・販売までを一貫して行う独自の経営で、高付加価値化と持続可能な農業を実現してきた。女性就農者の育成や地域の山林保全にも力を注ぎ、2024年には神奈川県女性農業者活躍表彰・県知事賞を受賞。小さな規模だからこそ生まれる、新しい酪農のかたちが注目を集めている。

岩手で芽生えた、山と牛への思い

高校時代、牛乳が好きで一日に1リットル飲んでいたという花坂さん。食品製造への関心から大学へ進学し、在学中に出会った書籍『黒い牛乳』が人生を動かした。「牛の力を借りて山を作る酪農」。その考えに強く惹かれ、岩手県の中洞牧場で4年半働いた。乳製品製造の責任者を任せられながら、休日には放牧や山の管理を学び、「いつか自分も山地酪農を」と思いを深めていった。

地域に入ることから始めた就農

2016年、山北町へ移住。牧場跡地は地域共有の財産で、住民の理解が不可欠だった。草刈りや行事に参加し、顔を合わせ、時間をかけて信頼を築いた。「地域の活性化のためにも期待している」。その言葉に背中を押され、2018年、ジャージー牛5頭とともに牧場を開いた。中洞氏から贈られた「転んだら起きろ。俺の背中を見ろ」という言葉は、今も支えになっている。

小さくても、続けられる経営を

放牧主体の山地酪農は効率重視の酪農とは異なる。だが、少頭数でも加工・販売まで一貫して行うことで、家族が暮らせる収入を生み出せることを示してきた。ソフトクリームや低温殺菌牛乳は評判を呼び、コロナ禍ではクラウドファンディングで多くの支援を受けた。「一人ではできなかった」。人とのつながりが経営を支えている。



花坂 薫さん

神奈川県足柄上郡山北町

次の担い手へ、 経験を手渡す

現在は夫と、移住者の若い女性と共に牧場を運営している。静岡で独立した女性就農者には牛を譲り、飼養管理の相談にも継続して応じている。放牧から加工までを担う女性の一貫経営は全国的にも珍しい。「自分の経験が、誰かの一歩につながれば」。そんな思いで、研修や見学も受け入れている。



未来へ向けた決意

「牛の力を借りて山づくりをしたい」。その原点は、今も変わりません。牛が草を食べ、根を張るノシバが土を守ります。災害に強い山を育てるこの営みを、特別な事例ではなく“当たり前の選択肢”にしたいと考えています。今後は、足柄茶を使った加工品の開発など、地域資源を生かした取り組みも進めていきます。山と人、そして牛が共に生きる風景を、次の世代へ手渡していきます。



評価のポイント

- 大規模化が進む酪農分野において、山地酪農という新たな手法に挑戦
- 放牧を通じて山の管理につなげる「牛の力を借りて山づくり」という独自の取り組み



経営局長賞

想像力で広げていく りんご農業の 新しいかたち

歯科助手や農産物販売業を経て、知人からりんご園を継承し就農した佐藤恵美さん。

子育て中の自身の暮らしを起点にした柔軟な働き方と、創意工夫あふれる商品づくりで、りんご栽培に新たな可能性を広げている。



佐藤 恵美さん(株式会社SATO FARM)

青森県西津軽郡鱈ヶ沢町

農業を避けてきた理由と、見方が変わったきっかけ

水稻農家に生まれた佐藤さんは、収入の不安定さや災害への不安、忙しい両親の姿を見て育った経験から、農業に関わらない人生を選び、歯科助手として働いてきた。転機となったのは、父や知人の勧めで始めた地元農産物の販売業である。商品の差別化や経営管理を学ぶ中で、「農業は工夫次第で可能性が広がる仕事かもしれない」と感じるようになった。さらに夫が大豆農家として就農し、家族の時間を大切にしながら堅実に経営する姿を間近で見たことが、農業への見方を大きく変えていった。

ゼロから始めた、りんご農家への挑戦

令和2年、りんご園の継承先を探していた知人から声をかけられ、りんご農家への転身を決意。「megumi farm」を立ち上げ、栽培技術や防除、出荷先の確保まで、すべてを手探りで進めた。周囲の農家に教えを請



い、失敗を重ねながらも経営の安定化を図ってきた。令和5年には夫の経営と統合し、「株式会社SATO FARM」を設立。現在は代表取締役として、りんご部門を担っている。

「私スタイル」が生んだ、働く人の輪

子育て中で長時間働けない自身の状況から、佐藤さんは生活リズムを大切に「私スタイル」の働き方を確立。フレックスタイム制や30分刻みの時給、急な休みにも対応する柔軟な雇用条

件を整えた。その結果、働きたくても条件が合わなかった子育て世代の女性を中心に人が集まり、現在は22人が登録。労働力の確保とともに栽培面積は約1.3haから3haへ拡大し、販売額も就農当初の2.5倍に成長している。

創造力で広げる、りんごの楽しみ方

規格外や小玉りんごをどう生かすかという課題に対し、販売業の経験を生かした発想で新商品を開発。変形りんごに表情シールを貼った「べたべたりんご」や、メッセージ動画が見られる「QRりんご」は、消費者の心をつかんだ。さらに自作の絵本『りんごって?』を用いた読み聞かせや農業体験を通じて、子どもたちに農業の楽しさを伝えている。活動は県内外へ広がり、多くの共感を集めている。



未来へ向けた決意

目指すのは、「佐藤恵美のりんごなら間違いない」と信頼される存在になることです。その言葉に応えられる品質と姿勢を、日々の仕事の中で丁寧に築いていきます。環境に配慮した栽培に取り組みながら、農業体験や食育活動もさらに充実させていきます。次の世代が職業の選択肢として農業を選べるよう、今できることを一つずつ実践していきます。



自作絵本



評価のポイント

- 農地を譲り受ける形での新規就農と、自身のキャリアを生かした取り組み
- フレックスタイム制やりんご作業の省力化により、子育て世代の女性を中心に雇用を確保し、規模拡大につなげている点
- 「QRりんご」や自作絵本など、創造性とオリジナリティを生かした食育活動



水産庁長官賞

海と人をつなぎ直す 蒲江から始まる 水産業の新しい挑戦

水産大学校で学び、漁師と結婚したことをきっかけに、消費者から生産者へと立場を変えた水本あゆみさん。担い手不足や魚離れといった水産業の課題に直面しながら、現場に根ざした工夫と発信力で、蒲江の海と水産業の価値を次世代へつなぐ取り組みを続けている。



水本 あゆみさん

大分県佐伯市

消費者から生産者へ 海の現場に立つ決意

水産大学校で学んだ水本さんは、縁あって漁師と結婚し、天然カワハギ稚魚の採捕・育成を行う夫の事業拡大を機に、2019年から共に漁業に携わるようになった。消費者として魚を選んでいた立場から、生産者として海と向き合う日々へ。漁師町ならではの暮らしや魚の魅力をSNSで発信すると、多くの共感を集め、次第に水産業の現状や課題を「伝える役割」を自覚するようになった。

仲間にも救われ、地域に恩返しする覚悟

赤潮やウイルスの蔓延により、カワハギ稚魚が全滅しかねない危機に直面したこともあった。廃業の瀬戸際で支えとなったのは、漁師仲間の存在だった。この経験をきっかけに、「蒲江の水産業を守り、支えてくれた人たちに恩返しをしたい」と



の思いを強くする。2021年には水産庁の「海の宝！水産女子プロジェクト」に参加し、大分県でただ一人の水産女子として、全国の仲間と学び合いながら活動を広げていった。

データと連携で切り開いた経営改善

事業拡大の壁となったのは、育成環境の悪化と慢性的な人手不足だった。2024年には潮通しの良い西浦湾へ漁場を移設し、過去の日誌や経理データを分析。給餌方法や管理手法を見直し、成



長段階に応じたマニュアルを整備した。さらに、水産業では珍しい水福連携にも挑戦し、B型就労

支援事業所へ給餌作業の一部を委託。人手不足の解消と作業効率向上を同時に実現し、生産量と売上はV字回復を果たした。



次世代へつなぐ、海の学びと誇り

2024年には若手女性漁業者による任意団体「KAMAEおさかな研究女子会」を立ち上げ、保育園での食育活動を開始。魚に触れ、育てる仕事を知る体験を通じて、子どもたちに水産業を身近に感じてもらう取り組みを行っている。また、女性向け漁業資材の商品化やSNS発信を通じ、漁業に関わる人の裾野を広げる役割も担っている。

未来へ向けた決意

これからは、繁忙期の安定した人手確保や養殖筏の規模拡大に取り組み、生産量と品質の安定化を図っていきます。あわせて、福祉施設や地域人材と連携し、担い手を育てる仕組みづくりにも力を入れていきます。「KAMAEおさかな研究女子会」の活動を広げ、食育や情報発信を通じて水産業の魅力を伝えながら、蒲江の水産業を次の世代につないでいきます。



評価のポイント

- 売上データの分析や労務管理の見直しにより、経営の安定化と売上を向上させた点
- 「KAMAE～会」の立ち上げと、地域水産業のPRや食育活動への継続的な取り組み
- 水福連携など新たな協働モデルを実践し、水産業の将来をリード



大日本水産会長賞

価値を見出した “ゴールド海苔”という発想

「一枚の海苔も、無駄にたくない」。
親子三代にわたり佐賀県有明海で海苔養殖を営む松本理絵さんは、近年深刻化する海苔の色落ちという課題に真正面から向き合ってきた。
見た目だけで価値を失い、廃棄されてきた海苔に新たな光を当て、商品開発や食育活動へとつなげる取り組みは、海と地域、そして次の世代を結ぶ力となっている。



松本 理絵さん
佐賀県鹿島市

「海苔の色落ち頻発」という現実

松本さん一家は、代々有明海で海苔養殖を営んできた。香り高く、やわらかで口どけの良い佐賀のりづくりに誇りを持つ一方、近年は海域の栄養不足などの影響で、黒く色づかない「海苔の色落ち」が頻発している。収穫しても市場に出せず、廃棄される海苔も少なくない現状に、「本当に捨てるしかないのか」という疑問を抱いたことが、取り組みの出発点だった。



「ゴールド海苔」と名付け、価値を見直す

色落ち海苔の成分を調べると、栄養価は決して劣っていないことが分かった。そこで松本さんは、この海苔を「ゴールド海苔」と名付け、新たな価値を見出す商品開発に踏み出した。「海苔は黒いものが良い」という固定観念や、地元業者の理解を得る難しさもあったが、粘り強く声をかけ、共感してくれる企業との連携が実現。海苔石鹸やゴマサブレ、キャンディなど、これまでにない商品が次々と誕生している。

廃棄を減らし、環境と経営の両立へ

かつては年間約26万枚もの色落ち海苔を廃棄していたが、取り組みにより活用量は着実に増加した。廃棄処分にかかっていた費用を削減できただけでなく、得られた収入を次期設備の購入に充てられるようになった。廃棄時の燃料の使用量も減り、環境負荷の軽減にもつながっている。



体験を通じて、海の現状と大切さを伝える

色落ち海苔の現状を知ってもらうため、松本さんは「海苔ふりかけ作り体験」を考案した。色落ち海苔に好みの具材を加える体験は、保育園や小学校、駅構内の催事などで好評を博している。2022年には妹とともに「のりのりシスターズ」を立ち上げ、活動を本格化。現在は「ふるさと先生」として子どもたちに有明海の話をする機会も増え、令和6年度は37回、令和7年度はすでに42回実施するなど、県内外へと活動が広がっている。



未来へ向けた決意

まずは、自社で発生する色落ち海苔の廃棄ゼロを実現したいと考えています。つぎに、地域で生じる色落ち海苔も買い取り、地域全体の収入向上につなげていくことを目指しています。これらが海苔養殖業者の減少に歯止めをかける力になると考えています。「一枚の海苔をきっかけに、海苔だけでなく一次産業が抱える課題にも目を向けてもらえたらうれしい」。海とともに生きる産業の未来を見据え、これからも取り組みを続けていきます。



評価のポイント

- 有明海の家産不作・色落ち問題を、独自の発想で商品化につなげた点
- 「一枚の海苔も無駄にしない」という理念のもと、廃棄削減とSDGsを実践した取り組み
- 商品開発や体験活動を通じ、海の環境や食文化を伝える食育活動の継続



農山漁村男女共同参画推進協議会長賞

里山の美しさと恵みで 地域を元気に

「病気にならないためには、日々の食が大切だと思った」。デザインと保健師の経験を持つ稗苗史絵さんは、中山間地域で米づくりに向き合いながら、加工・直売部門「のろしファームキッチン」を立ち上げた。食べることを通して、人と地域が元気になる。その思いが、里山に新しい流れを生み出している。



稗苗 史絵さん

富山県魚津市

異分野の経験が、農業へ

非農家出身の史絵さんは、短大で産業デザインを学び、企業で産業保健師として働いてきた。働く人の健康を支える中で、「予防には、毎日の食が何より大切だ」と実感するようになる。



そんな頃、自然栽培で米づくりに取り組む稗苗良太さんと出会い、その姿勢や思いに共感。2015年、結婚を機に農業の世界へと足を踏み入れた。

米のおいしさを、別のかたちで届けたい



北アルプスの雪解け水が流れ込む里山で育てた自社米は、食味コンクールで高い評価を受けている。「このお米を、もっと身近に感じてもらえたら」。

そう考えた史絵さんは、保健師としての視点を生かし、米粉を使った「おやき」の開発に取り組んだ。減塩で卵は使わず、腹持ちがよく、忙しい日でも手軽に食べられるおやきは、健康を意識する人たちの支持を集めた。

土地を知ってもらう場所づくり



コロナ禍を経て、「里山の美しさを知ってもらうには、やはり、来てもらいたい」と感じた史絵さんは、実店舗の開設を決意する。それが、「のろしファームキッチン」だ。おにぎりを軸に、地元食材を使った商品を

提供し、直売スペースでは地域内外の農業者の商品も扱った。訪れた人が、食べて、話して、地域を知る。そんな交流の場として、少しずつ人が集うようになった。



地域農業を支える役割へ

2019年には農業委員に就任。中山間地域で進む担い手不足や農地集積に向き合い、女性の立場から意見を伝えてきた。また、加工・直売部門では若いスタッフの育成にも力を注ぎ、チームで経営を支える体制づくりを進めている。



未来へ向けた決意

食を通じて地域の魅力を伝え、顧客確保につなげることで、経営の安定を図っていきます。また、地域を支えてきた先人の思いや技を次の世代へつなぐ役割も果たしながら、地域を元気にしていきたいと考えています。一次産業全体の未来も見据え、活動を続けていきます。



評価のポイント

- 水稻栽培から「ミスターおやき」やおにぎりの製造・販売までを一体的に行っている取り組み
- デザイン力を生かした商品開発により、里山の魅力を発信している点
- 農業委員として地域と関わり、食や地域資源の継承に取り組んでいること



農林水産大臣賞

花とスイカで 人を笑顔にする 全員が主役の園芸経営

「私たちが育てた花とスイカで、人に幸せや心の豊かさを届けたい」。瀬戸内の温暖な気候に恵まれた因島で、花苗と野菜苗の生産を続けてきた株式会社ジョージア園芸。女性も含めスタッフ全員が主役となる職場づくりを掲げ、現場から生まれるアイデアを事業へと育ててきた。花と人、そして地域を結ぶ取り組みが、島に新しい風景を生み出している。

因島の気候とともに育つ園芸経営

株式会社ジョージア園芸は、瀬戸内海に浮かぶ因島で花苗と野菜苗の生産を行ってきた。温暖な気候を生かし、多品目を安定して供給することで、ホームセンターなどの直接取引を中心に規模を拡大してきた。2022年の法人化を機に、「女性が主役となれる職場づくり」を会社の方針として明確に掲げ、農業法人として新たな一歩を踏み出した。

スタッフの主体性が育つ環境をつくる

農業の現場には力仕事も多い。そこで作業工程を細分化し、種まき、鉢上げ、土づくり、寄せ植えなどを担当制とし、女性従業員がリーダーとして責任を担える体制を整えた。かつては「社長の指示」を待つ場面も多かったが、現在は女性チームが主体的に判断し、現場をまとめている。従業員は自分たちで育てる花苗やスイカの品質改善にも積極的に関わり、分からないことを自ら調べ、工夫を重ねてきた。その結果、作業効率が向上するとともに、職場には一体感が生まれている。こうした積み重ねが、女性も男性



も誇りを持って活躍できる職場づくりにつながっている。



株式会社ジョージア園芸

広島県尾道市

花に想いをのせる、ブリコラージュフラワー事業

専務・村上理衣さんが主導するブリコラージュフラワー事業は、現場の女性たちの感性を生かした挑戦だ。寄せ植えレッスンの開催や商品開発、販売ツールの整備を通じて直販など新たな販路を開拓してきた。「自分たちで育てた花が、こんな形で人を笑顔にする」。その実感が、仕事へのやりがいと自信を生んでいる。



花と農業で、地域とつながる

同社は小学校やこども園と連携し、花植え活動や栽培指導を行っている。子どもたちが自分で育てた花で入学式や卒業式を彩る取り組みは、地域に温かな循環をもたらした。さらに因島特産のスイカ栽培にも着手し、地元カフェと連携した商品提案を実施。花と農産物を通じて、地域の魅力発信にも力を入れている。

未来へ向けた決意

花とスイカで人を笑顔にする島へ。ジョージア園芸が目指すのは、「因島は花とスイカで人を笑顔にする島」として広く認知される未来です。今後は女性リーダーの育成やブリコラージュフラワー事業の拡大、因島スイカのブランド化を進めていきます。女性が誇りを持って働き、地域とともに成長する農業のかたちを、これからも因島から発信していきます。



評価のポイント

- 農業法人として「女性が主役となれる職場づくり」を会社の方針として明確に掲げ、現場の仕組みづくりにも落とし込んだこと
- 現場の女性たちの感性を活かした事業は、会社だけでなく地域貢献にもつながっている点

農山漁村女性活躍表彰

[発行者;運営主体]株式会社 マイファーム
〒600-8216 京都府京都市下京東小路町607番地 気日ビル1階
TEL:050-5527-2841 MAIL:mfaward_r04@myfarm.co.jp

農山漁村男女共同参画推進協議会

[事務局]一般社団法人 全国農楽協同組合中央会 営農・担い手支援部
一般社団法人 全国農業会議所 経営対策部
〒102-0084 東京都千代田区二番町9-8 中央労働基準協会ビル2階
(一社)全国農業会議所内 TEL:03-6910-1124 FAX:03-3265-5140
<https://www.nca.or.jp/support/farmers/common/>

農山漁村男女共同参画推進協議会とは……

農山漁村女性の社会参画及び経営参画を推進し、男女共同参画社会の実現に取り組む任意団体です。

【構成団体】JA全国女性組織協議会／一般社団法人全国農業会議所／一般社団法人全国農業改良普及支援協会
全国林業研究グループ連絡協議会女性会議／全国漁協女性部連絡協議会／公益社団法人日本農業法人協会

本資料は、農林水産省補助事業「令和7年度担い手育成・確保等対策事業費補助金等(女性が変わる未来の農業推進事業)」の一環として制作しました。